第 42 回

大阪市都市景観委員会

議 事 録

日	時	平成 26 年 12 月 19 日 (金)
		午後 4 時 00 分～午後 6 時 06 分
場	所	大阪市役所 7 階 第 5 委員会室

大阪市都市景観委員会（第42回）

1. 開催日時 平成26年12月19日（金）午後4時00分～午後6時06分

2. 開催場所 大阪市役所 7階 第5委員会室

3. 出席者

(1) 委員（敬称略）

委員長	澤	木	昌	典	
委員長代理	嘉	名	光	市	
委員	岡	田	昌	彰	
	加	賀	有	津	子
	下	村	泰	彦	
	田	中	み	さ	子
	長	町	志	穂	
	橋	寺	知	子	
	山	納		洋	

(2) 市側

横山 建設局管理部路政課長

(3) 府側

戸田 住宅まちづくり部建築指導室建築企画課長

事務局（都市計画局）

安	藤	開発調整部長
山	田	開発調整部都市景観担当課長
中	西	開発調整部都市景観担当課長代理
松	崎	開発調整部開発誘導課 担当係長
松	村	開発調整部開発誘導課 担当係員

4. 会議次第

1 開 会

2 議 題

(1) 委員長の互選等について

- ・ 委員による委員長の互選
 - ・ 委員長による委員長職務代理者の指名
- (2) 今後の景観施策のあり方について
- (3) その他

3 閉 会

[配付資料]

- ・ 資料 1 都市景観委員会 委員名簿
- ・ 資料 2 - 1 今回の主な論点
- ・ 資料 2 - 2 今後の景観施策のあり方について
- ・ 参考資料 1 大阪市都市景観条例
- ・ 参考資料 2 大阪市都市景観規則
- ・ 参考資料 3 大阪市都市景観委員会運営要綱
- ・ 参考資料 4 大阪市景観計画
- ・ 参考資料 5 景観誘導事例〔委員限り資料〕
- ・ 参考資料 6 各施策のリーフレット等〔委員限り資料〕
- ・ 参考資料 7 他都市の事例

5. 議事の概要

○中西都市景観担当課代理

定刻が参りましたので、ただいまより、第 4 2 回大阪市都市景観委員会を開催させていただきます。

私は、本日の進行役を務めさせていただきます、大阪市都市計画局開発調整部都市景観担当課長代理の中西と申します。よろしくお願ひいたします。

まず、報道機関の方に申し上げます。

議事開始前までに限り、会場内の写真撮影、録画及び録音を認めます。審議中は、写真撮影、録画、録音等はできませんので、撮影等をされる場合は、ただいまの間にお願ひいたします。

また、携帯電話の電源を切るか、マナーモードに設定し、審議の妨げにならないよう、御協力をお願ひいたします。

本日の都市景観委員会には、委員 1 1 名中 9 名の方に御出席をいただいております。

本日は委員委嘱後、初の委員会となっておりますので、最初に、御出席いただいております委員の皆様方を事務局より御紹介させていただきます。

お手元の都市景観委員会名簿に沿いまして、御紹介させていただきます。

まずは、近畿大学工学部社会環境工学科教授、岡田昌彰委員でございます。

○岡田委員

こんにちは、よろしくお願いします。

○中西都市景観担当課代理

大阪大学大学院工学研究科教授、加賀有津子委員でございます。

○加賀委員

加賀でございます。よろしくお願いします。

○中西都市景観担当課代理

大阪市立大学大学院工学研究科准教授、嘉名光市委員でございます。

○嘉名委員

嘉名でございます。よろしくお願いします。

○中西都市景観担当課代理

大阪大学大学院工学研究科教授、澤木昌典委員でございます。

○澤木委員

澤木でございます。よろしくお願いいたします。

○中西都市景観担当課代理

大阪府立大学大学院生命科学研究科教授、下村泰彦委員でございます。

○下村委員

どうぞよろしくお願いいたします。

○中西都市景観担当課代理

大阪産業大学都市環境学科准教授、田中みさ子委員でございます。

○田中委員

田中でございます。よろしくお願いします。

○中西都市景観担当課代理

LEM空間工房代表取締役、長町志穂委員でございます。

○長町委員

長町でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

○中西都市景観担当課代理

関西大学環境都市工学部建築学科准教授、橋寺知子委員でございます。

○橋寺委員

橋寺です。よろしくお願いいたします。

○中西都市景観担当課代理

大阪ガス株式会社都市魅力研究室室長、山納洋委員でございます。

○山納委員

山納と申します。よろしくお願いいたします。

○中西都市景観担当課代理

なお、本日欠席されておりますが、大阪市立大学大学院法学研究科教授、阿部昌樹委員、それから、京都大学大学院人間・環境学研究科准教授、中嶋節子委員、合わせまして11名の委員の皆様には御就任いただいております。

それでは、本委員会の開会に当たりまして、大阪市都市計画局、安藤開発調整部長より、一言御挨拶申し上げます。よろしくお願いいたします。

○安藤開発調整部長

都市計画局開発調整部長の安藤でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

委員の皆様方には、大変お忙しい中、御出席いただきまして、厚く御礼を申し上げます。開会に当たりまして、一言御挨拶を申し上げます。

この都市景観委員会につきましては、これまで42回を数えておりまして、今回で8期目の委員委嘱となっております。本日、御出席の委員の皆様方には御就任をお願いいたしましたところ、快くお引き受けいただきましたことを厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございます。

本日は、議事次第にもございますように、今後の景観施策のあり方についてということで、都市景観委員会へ諮問させていただきますので、御審議のほどよろしくお願いいたします。

大阪市におきましては、平成18年度に景観法に基づく景観計画を策定いたしまして、一定規模以上の建築物等を対象に、周辺景観との調和という観点から、配慮事項の提出を求めておりますほか、それ以前から要綱に基づきます建築美観誘導制度などによりまして、まとまりのある街路景観の形成を目指してまいりました。ただいま申しましたこの建築美観誘導制度と申しますのは、例えば、御堂筋とか堺筋のそういう主要な街路に対しまして、

一定の景観的な配慮を求めていく制度でございまして、今、申しました御堂筋、堺筋以外にも、例えば、東西方向の市役所のすぐ南に土佐堀通がございまして、例えば、その1階部分は、土佐堀通から見て、川側に向けてシースルーになるようにしてくださいというような、今思いますと随分大胆なお願いもしてきまして、それをずっと積み重ねることによって、一定の成果を上げてきたのかなと考えております。

しかしながら、建築美観誘導制度につきましても、創設から30年以上が経過しております。今、申し上げましたように、一定の効果は上げておりますものの、一部路線では、まちなみの特徴が異なるといった区間もできております。また、近年の市域での土地利用の変化や更新、さらには、地域活動が活発化する中、大阪の景観もその姿を変えつつございます。

この後、事務局よりそれぞれの施策の実情や現状の課題等を説明させていただきますが、何のための景観施策なのかということも明確にしながら、地域が持つ場所の魅力を活かしつつ、地域の個性が発揮できるような施策展開を図れるよう、本市におけます今後の景観施策のあり方について、専門的、技術的な観点から委員の皆様より御意見を賜りたいと考えております。何卒よろしくお願い申し上げます。

簡単ではございますけども、挨拶とさせていただきます。よろしくお願いいたします。

○中西都市景観担当課代理

それでは、議事に入ります前に、配付資料の確認をお願いいたします。

失礼します、座って説明させていただきます。

お手元の資料の一番上に議事次第を置かせていただいております。次に出席者リスト、配席図となりまして、以降、少し分厚くなっておりますが、資料が続いております。まず、資料1、都市景観委員会委員名簿、資料2-1、今回の主な論点、資料2-2、今後の景観施策のあり方について、続きまして、参考資料1、大阪市都市景観条例、参考資料2、大阪市都市景観規則、参考資料3、大阪市都市景観委員会運営要綱、参考資料4、大阪市景観計画、参考資料5、景観誘導事例、こちらは委員限り資料となっております。参考資料6、各施策のリーフレット等、同じく委員限り資料となっております。参考資料7、他都市の事例、以上が配付資料となっております。不足等がございましたら事務局のほうにお申しつけください。

それでは、次第に従いまして、しばらく進行役のほうで進めさせていただきたいと存じます。

まず、本日1つ目の議題でございますが、委嘱後初めての委員会でございますので、最初に委員長の互選について諮りたいと思います。

委員長につきましては、大阪市都市景観規則第17条第1項の規定により、委員の皆様
の互選により定めることとなっております。どなたかご推薦を頂戴したいと存じますが、
いかがでしょうか。

○下村委員

非常に都市景観に関する造詣も深く、これまでずっと本委員会を取りまとめていただい
ております澤木委員に委員長をお願いできればと思いますが、いかがでしょうか。

○中西都市景観担当課代理

よろしいでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

○中西都市景観担当課代理

ありがとうございます。

それでは、澤木委員に委員長をお願いしたいと思います。よろしく願いいたします。

まず、委員長より御挨拶を頂戴したいと存じます。よろしく願いいたします。

○澤木委員長

ただいま、委員長を拝命させていただきました大阪大学の澤木でございます。よろしく
お願いいたします。

私自身、この横におられる嘉名委員と下村委員、ともに先ほどお話にありました平成1
8年に策定された大阪市の景観計画、景観法が施行されてすぐ対応していく形でつくった
景観計画でございますけれども、この策定にかかわってきたという経緯もあります。この
後、市長から諮問を受けているテーマが、今後の景観施策のあり方ということで、非常に
大きなテーマをこの期の委員会で検討してほしいということですので、我々が平成18年
当時に反映し切れなかった部分とか、この間の社会情勢の変化とか、景観法が10年経過
して、各地でいろんな試みがされている。そういうことを踏まえつつ、大阪市の景観計画、
あるいは、要綱も含めたいろんな景観行政のあり方を皆さんのいろんな角度からの御意見
をいただきながら、しっかりとフィロソフィーと屋台骨みたいなものをつくっていきたく
いと思っておりますので、どうぞよろしく御協力いただければと思います。

以上、簡単ですけれども挨拶に代えさせていただきます。

○中西都市景観担当課代理

ありがとうございました。

引き続きまして、大阪市都市景観規則第17条第3項の規定により、委員長職務代理者につきましては、委員長が指名することとなっております。澤木委員長、いかがいたしましょうか。

○澤木委員長

委員長職務代理者ということで、お手数をお掛けするんですけれども、前期に引き続きまして嘉名委員にお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

○中西都市景観担当課代理

それでは、嘉名委員、委員長職務代理者をお願いしたいと存じます。委員長職務代理者の席にお移りいただきたいと存じます。

これからの議事進行につきましては、澤木委員長にお願いしたいと存じます。よろしくお願ひいたします。

○澤木委員長

それでは、議事に入りますけれども、その前に、当委員会については、運営要綱3の(3)に基づきまして、議事録署名人を指名してお願いすることになっております。今回は新任の委員ですけれども、岡田委員と加賀委員のお二人に名簿の順番ということで、お願いしたいと思いますので、よろしくお願ひいたします。

それでは、議題に入っていきますけれども、議題の(2)今後の景観施策のあり方について、本日付で当委員会の委員長宛てに橋下市長から今後の景観施策のあり方について、調査審議を賜り答申いただきますようという諮問をいただいておりますので、これについて審議をしていきたいと思ひます。この後、事務局から資料の説明をいただきますけれども、あわせて当委員会において調査審議する内容であるとか、今後の取りまとめ、答申までのスケジュール、こういったことについても御説明いただければと思ひます。

それでは、事務局、よろしくお願ひいたします。

○事務局

資料説明

○澤木委員長

どうもありがとうございました。かなり多岐にわたる内容を短時間で報告いただきましたので、少し新任の先生方にはわかりにくいところがあったかもしれませんが、御質問も含めまして、今日はキックオフということなので、自由に御意見をいただければい

いと思っておりますので、これまで大阪市の景観あるいは景観行政を見てきた感想も含めてで結構ですので、御質問、御意見をお出しただけならと思います。よろしくお願いいたします。

じゃあ、岡田委員、お願いいたします。

○岡田委員

近畿大学の岡田です。よろしくお願いいたします。

今日、初めて参加させていただきますので、ちょっと細かい話になるのかもしれませんが、この前段階の委員会でどういう議論があったのか確認しておきたいところが1点あったんですけども、先ほど、冒頭で御説明いただきました、15ページの、エントランスの部分を通して河川への見通しを確保するという考え方なんですけど、これは眺望とか、視点場をどこに置くということと深く関わって、この景観をどう捉えるかということをお話されているようで、大変興味深い施策であると感じたんですけども、ただ、これは恐らく、河川への見通しを確保して反対側の通りからの眺望を確保したいということで、それは非常に意義のあることだと思うんですけども、例えば、今、写真にあるようなエントランスホール、これはかなり奥行きがあると思うんですけど、こういった形で確かにこれは両方とも透明で、視界が通っているように見えるんですけども、これによってどれほど河川への眺望が実際に確保されるのか、あるいは、この通りを歩いて、実際にどの視点場、どういう眺望を想定した上で河川への見通しを確保する、ある意味、親水性を向上することなのかもしれませんが、この辺の考え方を教えていただければと思うんですけど。

○事務局

具体的に今まで、どう誘導してきたかについては、資料の中にパンフレットがあるんですけど、土佐堀通の基準の中で、基本方向、区域、建築物の配置とあって、その建築物の配置基準を3つに分けているんです。谷町筋から御堂筋沿道の北側、それから、谷町筋から四ツ橋筋沿道の南側、それから、四ツ橋筋からなにわ筋と分けていまして、その中の谷町筋から御堂筋沿道の北側のところで、建物の配置については、大川・中之島への見通しが得られるよう計画などに工夫する。こういう表現で工夫をお願いをして、具体的に建物を新築されるときに、こういう視点で建物の工夫をしていただいて、それが結果として、こういう形で通り抜けを意識したような形の建物が建っているんですけども。土佐堀の全てやったわけじゃなくて、この区間に限ってこういう誘導を今までしてきたということ

です。

○澤木委員長

エントランスホールを通してという話は配置というよりは1階部の形態じゃないですか。

○事務局

そうですね、配置と1階の形態と両方です。

○岡田委員

わかりました。目指されているところはすごくわかりやすいんですけど、ただこれで本当に親水性が確保できているかどうかは、今の段階ではちょっと疑問に感じざるを得ないんですけども、それはいかがですか。

○事務局

そのあたりを逆に今回検証して、どうしていくかを議論してもらったらいと思うんです。建築美観誘導制度は、いわゆる景観法ができる前の建物単位の制度だったと思っています。それで、建物単位で1階部の形態や配置を意識してもらっていたんですけど、今、景観法ができてから、やはり周辺のまちなみとの調和というのが大きな観点になってきましたので、個々に見て、一定できてきたところはあるんですけども、いま一度、どうこれを改めてバージョンアップなりしていくのかについて、今回、議論をいただくことが主眼かと思っておりますので、そういう形で御理解を賜れたらと思います。

○岡田委員

わかりました。ありがとうございました。

○澤木委員長

ありがとうございます。

そのほか何かございますか。

安藤部長。

○安藤開発調整部長

今の件で、またいずれ現地を見ていただきますので、実感していただけたらと思いますが、もともとこれを目指したのは、やっぱり大阪は水の都だというのがあって。ところが実際には、中之島のちょうどこの場所に中央公会堂や中之島公園といったいい景観があるのに対岸から望めない状況になっていた。そういう大阪として誇るべき立派な景観資源があるから、それをできるだけ活かしたまちづくりをしていこうということで、こういう1階のシースルーを進めていたと。写真よりも、もう少し大胆にシースルーにさせていただいてい

るところもありますので、実際に現地を見ていただいて、その上で今後の取り組みについて御意見を賜ることができればと思います。

○事務局

特に、足元周りは写真ではなかなかわからないので、寒い時期で申し訳ないんですが、1月か2月に現地調査をします。

○岡田委員

はい、じゃあその後で。ありがとうございます。

○澤木委員長

ありがとうございます。

そのほかいかがでしょうか。

長町委員、お願いします。

○長町委員

これまでに取り組まれてきたことや、今、行われていることをわかりやすくまとめていただいて、本当にありがとうございます。

それで、どんな効果が出ているか、私も含め皆さんの実感もあると思いますが、実際に、景観施策そのものが効果を上げてきていると思うんです。

そこで、これからどうするのかという議論をこの委員会でするんだと思うんですが、やっぱりまちのデザインの捉え方というか、まちそのものの捉え方が時代によって随分変化したと思うんですね。例えば、随分昔の都市政策というのは、都市計画も含めて、大きな塊でという考え方だったのが、今は、個別解をどう編み上げるかになっていると思うんです。そういう意味でいくと、やっぱり大阪市全域を一つのルールや枠組みで語っていこうというのは、余りよろしくないんじゃないか、目標が見えにくくなるんじゃないかと。そういう市域全域を対象としたことには、もうそれなりの結果がありますから、今度は、どこが重点エリアで、どこが大阪を代表する景観かというのを議論していく。もっと言うと、世界のまちのマスタープランをいろいろ見ていると、もうちょっとエリアは小さい感じがしますので、少なくとも、市域全域を重点地区に分けるというのは広過ぎて。イメージでは、今日挙げていただいている地図ですと、23ページに市域全域の地図があるんですが、この中の中央部分、仮に中之島だけとっても、ほぼロンドンの中心部のマスタープランと同じぐらいのサイズ感なんです。シンガポールも多分、この中之島エリアを囲んだぐらいだと思うので、そういう意味でいくと、そういうやり方というのはいかがかなというのが

私の意見です。

まとめますと、大阪市の景観施策の目的は何かといったときに、市域全域が同じ目的ということはないと思うんです。国際都市間競争の観光で勝つエリアもあれば、住民の健全な生活みたいなことが目的のエリアもありますので、そういったものも含めて、景観行政がダイバーシティというか、多様性を持つような狙いのつけ方はいかがでしょうか。

○澤木委員長

ありがとうございます。

そのほかの委員、いかがでしょうか。

加賀委員。

○加賀委員

こういう景観整備をしていく中での地域との連携にすごく関心がありまして、今まで、まちづくりの活動支援やHOPEゾーンといった積極的な取り組みをされてきたところなんですが、今、それ以外のまちづくりの活動団体というのが景観系で出てきていまして、図面ですと21ページでしょうか。一番右欄の地図の下にいろいろまちづくり推進団体や活動なんかを書いている中で、今、どういうふうな傾向が、地域活動と景観というつながりの中であるのか教えていただきたいと思います。

○事務局

景観との関わりというよりは、地域活動がどんな状況か私が見える範囲でのお答えになるんですけども、例えば、HOPEゾーン事業ですと、まちに入って行ってガイドライン的なものをつくって、初期の改修をするときに補助で後押ししている。初期段階のことをやっているんです。それでいろいろできてきたときに、将来や次につなげていくためにどうするか。これは他局の施策ですけど、そういう点が課題になっていて、そういうところをうまく広げていけたらいいと個人的には思っているんです。

あるいは、まち支援制度というのがありまして、まちづくり活動の初期の構想づくりとか組織の立ち上げの段階でアドバイザーを派遣したりする制度を持っていまして、こういう制度もうまくいけば地区計画につながったり、建築協定といった法令に基づくところまでいくんですけども、そこまで行き着かないものもあるんです。他都市を見ますと、東京都がしゃれ街条例をつくって、地域でまちなみの誘導を自主的にコントロールできるようにしたり、京都市さんも同じようなことをされています。

ですので、まちづくり団体が構想をつくって、最終法令によるところまでうまくいけば

いいんですけど、その途中段階でも支援していったら、それが結果的にもっと先につながっていくといったことも考えていったらいいのかなと思っています。

ですので、いろいろな取り組みの中で、全部が景観じゃないけれども、景観を軸足としながら後押しすることを考えたらどうか、制度的にはそんな感じで思っています。

○澤木委員長

よろしいでしょうか。

じゃあ、田中委員。

○田中委員

何のために景観形成をするのかを、もっとはっきりと出すべきというのが私の個人的な考え方なんですけれど、建築美観誘導制度もいろいろ取り組まれていて、成果がかなり上がっているとは思ってるんですけども、例えば、大阪といたら難波宮もあるし、大阪城ももちろんあるし、歴史も文化も非常に多様な誇るべきものがたくさんあるんですけど、そういうものがあまり反映されていない。それがあるから、こういう方向性で景観形成すべきという話が余り出てきてないと思うんです。

ですから、例えば、観光という視点で、伊勢のまちだったら伊勢神宮の遷宮といった、ものすごくはっきりした目的があって、それに乗かっていくことで成果が上がっているの、大阪も市の政策として観光をもっと進めると言っていたので、それだったらその視点で景観形成が今後どうあるべきかという、そういうことを考えるべきではないかと。

何か、全般的にきれいなまちにしましょうということできずっとやってきたと思うので、それをもう少し市民にもっと理解してもらえるように、観光のために、例えば、大阪でマラソン大会があって、テレビで映されるとなると、大阪のまちがみんなに見られるわけですから、そのコースの周りは全部きれいにしましょうとか、そういう考えをもっとはっきり打ち出すと、どんな景観にしたらいいかとか、そういうことももっと議論できるんじゃないかなと思います。

○澤木委員長

ありがとうございます。

じゃあ、山納委員。

○山納委員

山納と申します。

このⅡ番の景観形成の目的・意義と今後の景観構造の考え方を見ていて思うところをお

話したいと思うんですが、誰のためのデザインなのか、その間いがあるんだろうという気がいたします。

僕は、大阪デザインセンターのデザインビジネス塾の塾長をしていて、プロダクトデザインとか、グラフィックデザインに関することをよく見ていて、余り景観には詳しくないんですが、作り手にとってのデザインと売り手にとってのデザイン、使い手にとってのデザインが違うということ。それをどうすり合わせるのかが問いになっていて、デザイナーが作りたいデザインがあって、それを売りたい、売り手や売り場、営業が求めるデザインがあって、それと消費者が本当に求めているものが違うときに売れないということになるんですが、景観というものは何かこれがもっと複雑な様相を示しているのかなど。デザイナー、プランナーがいて、それを建てる人がいる。施主、クライアントがいて、それを使いこなす人というのはテナントなのだろうか。お客さんとして使う人と観光客、見ているだけの人がある。この誰にとってのデザインかということがずれるから多分、ハレーションが起きるんだろうなど。大きな看板を出すとかいうのは、テナントで入っていて、自分の商品を買いたい人が景観に関わるとノイズが起るんだろうなど。

先ほど、まちのデザインの捉え方が時代によって変化してきていると長町委員がおっしゃっていて、そうだろうと思います。ほかのジャンルでいうと、ファッションのデザインがどんどん川上から川下に移ってきている。デザイナーがつくってコレクションに出して、それを消費者がありがたく買うことはどんどんなくなってきていて、消費者、買い手が欲しいものをつくるというふうにデザインが変わってきている、コレクションの形も変わってきているのですが、まちということに関して、最近すごく感じるのは、ヤングールさんという方が人間のまちと日本語で題された本を書かれています。それは大きくは自動車社会から人間の社会とか、歩行者にとってのまちという、自動車よりも歩行者にとってのまちという視点が変わってきていたり、愛着を持てるとか、使いこなせる都市空間はどんな形をしているんだろうということやいろんな事例を挙げて紹介をしているんですが、多分、これは使い手、消費者にとってのまちなんだろうなという気がします。売り手がはしたなくも派手な看板を掲げるといったことは規制していいと思うんですが、実際のまちの使い手、そのまちに愛着を持つような人たちが求めることというのは、美しいけれど殺風景とか、非人間的にスケールアウトした大きな空間ではなくなっているんだろうという気がしています。

50年前にジェイン・ジェイコブズさんがアメリカ大都市の死と生という本を書いて、

ハドソン通りという通りにいかに人がいて、そこで人がまちを監視しているとか、にぎわいを媒介しているとか、顔役がいてコミュニティがそこで生まれているというようなことを語っていて、その後の都市計画では、そういった考え方がどんどん主流になっている気がするんですけど、こういうまちの使い手がいいなと思うまちと景観が、これまでの美観、景観とずれてきているのであれば、それをどう取り組んで景観形成を図っていくべきなのかということ、答えは持っていないで、考えていく必要があるのかなと思うという感想でございます。

○澤木委員長

ありがとうございます。

橋寺委員。

○橋寺委員

多分、個性のあるエリアが求められているということで、今までの施策を見ると、定性的というか、何メートル以下で、色はこの範囲でと標準的に決まっていて、それはそれで大事なんですけど、次にいくとしたらもっと具体的にということだろうと思います。大阪は大きくて、誰のためのまちかというのも、多分エリアによって全然違って、大阪城はもう世界レベルかもしれないし、でも、なにわ筋沿いの住宅はそうなのかといたら違うだろうと思っています。

私は建築が専門で、景観重要建造物とかがまだないというのがあって。通りの全体の統一も大事で、多分それがある程度できたら、次はその中でも個性的なものとか、みんなが知っているものとか、そういう点としてのものを具体的にポイントアウトして、そういうものが何か1つあれば、みんながああ角ねと言ってまちに親しみが湧くとか、どこで話をしてもわかるということがありますので、何かそういう全体的にできたものの中にもう一個、具体的な個性を持ったものを放り込んでいながら、各エリアに合ったものをつくっていくのが次なのかなと思っています。

大阪城なんかは見える、見えないの視点場の話だったのかもしれないですけど、もちろん近くへ行ったら見えるもので、それはもう誰でも知っているものだけでも、意外とまちの何か違うところ、川沿いから見えるポイントがすごい大事だとか、何かそういう点としてのものの価値もあると思うので、そういうのが今、ずっと見ていると少ないという気がして、せっかく景観資源を毎年10個、20個選んでいるので、そういうもの、レベルの違うものもいっぱいあると思うんですけども、そういう点を今のこういう全体の枠

組みの中に入れていけると個性が出るのかなど、感想ですけれども思いました。

○澤木委員長

ありがとうございます。

じゃあ、下村委員。

○下村委員

今、市が何で悩んでおられるか客観的に考えますと、具体的規制誘導もしくは啓発、これによってまちなみを整備して景観形成を図っていくという話と、景観計画が10年経って、計画そのものの考え方がこれでよかったのか、先生方がおっしゃるように、社会情勢や、新しい建物、ライフスタイルも変動しつつある中で、大きなところから具体的な施策まで、もう一回見直す必要があるんじゃないかということです。

その中で、ディテールについては景観計画ができて美観誘導の4本がなくなる中で、屋外広告物をどうしていくかも含めて、景観からディテールデザインをどう誘導していくのかももう一回詰めていかなければならないという話と、景観というものの構造をもう一回捉え直していくことも必要だということで、やっぱり御堂筋は北と南と真ん中とを分けるのと同時に、北エリア南エリアそれぞれゾーンとしてこういう施策でいこうということと、その間の調査があまりされていない白地の地域、御堂筋となにわ筋、堺筋との間というふうな横渡り的な、大阪城を向いた道路のほう幅員が広がったというのは、当時、大阪城がシンボルだったからこそ、船場のまち自体が全部東に向いていたんですね。それを關一市長が御堂筋を抜いた後、モータリゼーションの発達とともに南北方向が軸線になったために美観誘導が南北になったので、もう一回、歴史的な大阪の、例えば、上町台地の地形構造や、大川の流れといった自然物を対象とした景観誘導を考えるのであれば、もっとそういう視点場を重要視しながら景観誘導を図るようなゾーニングが多分必要になってきて、そういうことをしっかりやっていくのが大阪の景観構造を捉えていく特色であるので、そういう話のストーリーを設けながら、北のエリアや南のエリアそれをつなぐ東西方向の考え方を景観の構造として捉えていくこともやっていくべきではないかと思います。

また、これも申し上げていたんですけど、景観形成の基本目標のアメニティという言葉はもうやめたらいいのではないかと。公害が下火になった後、イギリスで出てきた言葉を80年代くらいからそのままアメニティという目標にしているので、快適性というのは悪くはないんですけど、やっぱりもうちょっと今の話題に沿ったようなテーマ出しをしておく取り組み方も違って来るんじゃないかなと。こういうふうに大きな観点からもう一回

見直すのと同時にディテールまで考えていくような、そういうタイムスケジュールとか、段取りを組んでいくのがこの会議で検討する内容かなと感じております。

○長町委員

スピード感が出ないんじゃないですか、押しなべて全域のことを議論していこうとする

と。

○下村委員

いや、そんなことはないですよ。押しなべて全部するというのではなくて、メリハリをつけるということです。ゾーニングをして、やるべきところとやらないところ、まあ、ええやんという大阪の概念をどこに盛り込むかですよ。

○長町委員

下村委員がおっしゃっていることはとてもわかるし、そのとおりだと思うんですけど、世界はもっと速く動いている感じがしていて、例えば、オール大阪で、大阪城はパークマネジメントをやると決めましたと。それは景観じゃなくてやる。今度は川でインナーベイ・マーケットリゾートをやる、違う施策が動いているわけですよ。そこで市として動かすエリアが見えているんだったら、景観もすぐに手を打って、川沿いの景観が揃ってきて5年ぐらいで結果が出るというのをやれないかと私は思うんです。アカデミックに詰めていくことも重要だけでも、そうすると、外国のような5年前と全然違うすごい景観ができたといったことは起きないですよ。これは私の意見ですけど、全てを研究していくようなやり方でいくと間に合わないと思うんです。ここにいらっしゃる方も皆さん、世界のどこよりも大阪がいいとは思っていない。今日までも景観行政をやってきて、日本の都市の中でも御堂筋も含めて頑張ってきていると思うんです。でも、同じようにやってもそのレベルなんです。なので、もっとラジカルなことというか、てこ入れがいる気がするんですけど、どうですか。

○下村委員

全然否定する気はないですけど、両方必要だと思うんですよ。声が大きい人ばかりが今、目立っているような世界で、それもそれでいいんです。だけど、誰が聞いてもここはなぜそういうデザインになったのかというのを説明できるようにしていく。先ほど言ったディテールのデザインを論理づけるところも見直しと。ディテールばかりにいこうとすると今までの計画が大きく見直せないで、速くやらないといけないところや、やるべきところは先にやると。

○長町委員

その優先順位はつけられそうですか。非常に分厚い根拠を持ちつつ、でも一番急いでいる、やらねばならないところには集中的に施策を打つみたいなのを、優先順位をつけながら、景観行政をやっていく中で取り決めていく。

○下村委員

個人の意見で言わせていただくと、ちゃんと横当たりの調整会議がつかれるかだと思います。景観に配慮して緑地もつくってくださいと商業エリアにもちゃんと盛り込むところに景観がどうやって入っていくかですね。そのためにはここだけで言っても仕方がないところもあって、そういう議論の場を設けるまで頑張っていたかかないと、決められどできないということになってしまう気がします。

長町委員がおっしゃるとおり、絶対にやらないといけないところは先にやらないといけないのです。だから、ある市では早くやらないとだめだといって、計画とガイドラインをつくる順番を入れかえたときもあるんです。ですから、どこから目をつけていくかということと、それがちゃんと論理的に考えてあるということでない、事業者さんが納得しないと思うんです。景観というのは規制誘導して抑制するという働きもありますので、いい方向の建築コードやデザインコードをつくって、こういう形でやったらいいまちができると同時に、抑制でもありますので、その中でどこからやっていくかというのはいろいろ御意見を出していただきながら。

○長町委員

この委員会でそれができたらいいですね、そう思います。

○下村委員

ただ、全部のプランがここに出てきて、景観面で意見が言えるというのは理想ですけど、そういうのはなかなか難しいかなという気がするんです。

○澤木委員長

よろしいですか。お二人の論点というのは、下村委員の立場はどちらかという景観計画のあり方といった立場でおっしゃっていて、長町委員はそのまま施策という、この諮問が今後の景観施策のあり方で、実際にどう動かしていくかという、現場に近いところに立たれて言われているので、一見ずれているようですけど、目指すところは同じかなと思うんです。特に、私も冒頭に景観計画に引っ張られたことを言ったかもしれませんが、今の景観計画をつくってきた人間から言うと、もう少し計画のところにとっかかりと骨を入れ

て、それに基づいて、例えば、長町委員がおっしゃるように、5年で何をするのかと、ほかのプロジェクトや施策で動いていたら重点的に施策を統合して、景観デザインでもやっ
ていこうといった実行計画ですよね、単年度とか、短期の。そこにどうつながっていくか
というトータルなデザインを考えていくような話が必要だという意見が出ているのかなと
思うんです。

この委員会で以前は景観計画をつくったら終わりといったところがあって、実施は任せ
ますというところがあったんです。一応、景観法ではこういったところを計画しますが、
あとはこれまでの条例と要綱で運用していくといった形で合体して走ってきただけといっ
たところがあって、そういうことで見ていると、大阪市の景観の特色とか、大阪らしさみ
たいなものが見えないとここ10年私は思っていて、京都は京都なりにポリシーを持って
やろうとしているし、神戸は神戸で特性を活かそうみたいなことをやっているんですけど、
大阪は、やっぱりこのアメニティと美しさという言葉がよくなかったのか、大阪っぽくな
いんですよね、俗に言うと。

だから、今日いろいろお話が出ているように、大阪を代表するものは何なのかとか、ど
こを重点にもっと売り出していくべきなのか、そういうことは計画が全域を対象にしてつ
くっていかないといけないんですけど、戦略的に考えたときに、どこを打ち出していくん
だというところですね。あと、ツールとしての要綱や指導行政があるんですけども、この
ツールがそれに合っているのかも含めて、行政が実際に運用していくときに使いやすい道
具なのかも含めていろいろ御意見をいただければ。今日は最初なので、いろんな計画レベ
ルの軸と戦略的な話とツールの話といった、いろんなところが入り交じってきていると思
うんですけども、その辺を整理していくと、多分、皆さんの思っているところは共通する
ところはかなり大きいなという感じで聞いておるところですが。

嘉名委員、いかがですか。

○嘉名委員長代理

まず、1つは、実は大阪市の建築美観誘導制度というのは最も早い部類の制度で、まだ
景観という概念が余り定着していない時期に建築単体の誘導ではあるんですけども、建築
美観誘導でまちなみをつくっていこうという、当時としてはかなり新しい考え方でやっ
ていたということですね。

ところが、やっぱり30年たってくると、時代に合っていないことも出てきていますし、
やれるところはやっているけれど、どうしてもやれないところが残っているところもあっ

て、やっぱり時間軸で考えたときに、現行の制度を時代に合わせて見直していく、あるいは次の30年に合わせて見直していくというのが一つ大きな問題でテーマだろうと思っています。

大阪はどちらかというと、そのときそのとき必要なところに施策を入れてきているというのが一つの流れとしてあって、マップで見ると、いわゆる地域性を加味した景観政策は、実は都心に集中しているんですね、御堂筋とか、船場とか、大川沿いとか。そういうところの景観をよくしようとしてきている。これがどちらかというと、地域性を際立たせていくための政策としての景観という考え方、そういうのが一つの大きな柱としてあった。

もう一方でいわゆる大規模なもの、これはどちらかというと、市域全域を対象に、いい建物をつくりましょうというよりは、変なものをつくらないでくださいという考え方に立っていると思うんです。景観的に影響が大きいものについては周辺の景観への配慮を考えてくださいと。これは目立ってもらわなくてもいいけれども、悪影響を及ぼさないようにしてほしいと。これは両面で考えないといけないというのが大きな考え方だと思います。まず、後半の話から言うと、大規模については前回の景観計画からの議論だと思うんですが、市域全域が一律の基準で妥当なのかどうかは検証したほうがいいと思っています。というのも、規模が同じであっても影響力は市街地の特性によって全然違う。住宅系の用途のところでは、そこそこの大きさでも影響は大きいという実態があると。そういうことが今の基準で本当に対応できているのかどうかしっかり検証しないといけないという気はします。景観政策として大規模がどうしてもベースにはなってくるので、その検証はきちんとしたほうがいいと思っています。場合によっては、大きく3種類ぐらいの用途やゾーンに分けて、考え方やハードルを変えるということも方法かなと思います。それが1点目です。

それから、個性を磨くタイプの景観施策をいろんな考え方で、というのがありますが、平成18年に議論していたのは、最近でこそ中崎町とか空堀とか、いろんな地区がおもしろいねという話が定着していますけど、そういう場所、場所に合わせた景観のルールみたいなものを打ち出していくという話が当時からあったように思います。今も、HOPEゾーンといった方法がないわけではないんですが、景観の施策として考えていくのもいい気はします。都心の施策とは違うかもしれませんが、小さな面的なまとまりみたいなものをアイデアとして持っておくというのものもあるかもしれません。

それから、今、既に入っている都心の施策を時代に合わせて見直していくこと。例えば、

極端な言い方ですが、道頓堀なんかはニューヨークのタイムズスクエアの特別ゾーニングみたいに、地域性を強調するためにむしろもっと広告を出してもらおうとか。

前回までの委員会でデジタルサイネージについての議論があって、エリアマネジメント活動をやっているところや駅前だったら認めていこうという話でしたが、例えば、地域のにぎわい景観を演出していくための広告物やデジタルサイネージなんかを、地域団体が自主的に運営するというのであれば、もっと積極的に認めてもいい気はします。

そうすると、地域活動型の景観づくりと規制緩和みたいな話が絡んでくる。私がよく聞いているのは、イベント期間中だけでも広告掲出できないかという話が、活動費を捻出しようというときに出てくる。常設では規制が難しいという部分もあるでしょうけど、そもそも広告物の概念として、期間限定で出るとは位置づけとしてあまりなくて、イベント期間中だけは認めるとか、まだまだにぎわいある景観をつくっていくために規制緩和していく余地はあるのかもしれない。ただ、そもそも大阪市の場合は、屋外広告物と、都市景観の管轄が違うので、そのあたりも大きなテーマになるのかもしれない。

それと、東京都と特別区がやっている景観政策の話があって、今回は東京都の分が資料についているんですけど、東京都はどちらかというと、観光とか、眺望とか、しゃれ街というところに絞ってやっている。なぜそういうふうに首都東京の顔づくりみたいところに絞れるかというと、実は特別区がそれぞれ景観政策をやっているからなんです。だから、ベースの部分は特別区がやっていて、東京都はオール東京で考えたらいいようなことや、眺望なんかがまさにそうだと思いますけど、区域をまたぐような話は東京都の役割だと、結構役割分担の考え方がはっきりしていると思うんです。

大阪市の場合は、両方やりましょうといった話が出てきて、ただ現状で、24区にやってもらうのは難しいとなると、大阪市の都市景観行政としてどこまでやっていくのか、ロードマップを描きながら優先順位を考えていかないといけないのかなと。多分、これからも委員の先生方からいろんな意見が出てきて、それを全部やるのは現実的に難しいとなると、どういう順番でやっていくのかという議論も考えてないといけない気はします。

以上です。

○澤木委員長

ありがとうございます。

そのほかありましたら、どんどん出していただければと思います。

田中委員。

○田中委員

資料の7ページに景観協定とか、景観協議会とか、市民景観協約があって、どれも余り成果が上がってないんですけれども、大阪のまちの成り立ちからすると、本当は市民の力がすごくあって、市民がまちをつくってきた歴史性はあると思うので、やはり景観というのは一般の市民、または、事業者や土地を持っている方、そういう人たちが理解してくれない限り進まないものだと思うんです。そういう意味では今まで進まなかったというのは、原因はわかりませんが、もっとやるべきことがあったのではないかと思いますし、例えば、神戸市なんかはたくさん協定を結んだということですから、もっと市民に理解してもらって、市民の力を借りるような方向性を出さないと、いつまでも規制されて、言われたからやるというものだといい案も出てこないと思いますし、そのあたりは今後の施策の中で重点的に考えていただけるならありがたいと思います。

○澤木委員長

加賀委員、どうぞ。

○加賀委員

重点的にどういう形でやっていくかということで、やはりゾーンというか、地域の大きさの捉え方は大きいかなと思っています。大阪駅なんかはそれこそ大阪の玄関口で、その景観をどう考えるのか、そういうところからすると、大阪駅とその周辺ゾーンぐらいのかなり絞った地域の中で、景観の見る見られるというところも含めて、どういう形で地域の個性を出していくか、実際に考えていったほうがいいと思います。そうすると、嘉名委員がおっしゃっていたような、規制緩和とデジタルサイネージで地域の個性みたいなものを出していくことをどこまで考えるかということも、地域を絞っていくこととあわせて考えていくといいのかなと私は感じます。

ですので、21ページでは、点線で囲まれたかなり大きなゾーンの捉え方で見ているんですけれども、これがもう少し串刺しみたいな、もう少し地域の大きさも捉えてというような、長町委員がおっしゃっていたところにも通じるのかもしれませんが、そういうところで重点化や、優先順位を考えていくこともあるかなと感じました。

○澤木委員長

ありがとうございます。もっと小さいゾーンですよ。

○加賀委員

はい、そうです。

○澤木委員長

そのほかいかがでしょうか。

岡田委員。

○岡田委員

この前議論の中で紹介いただいたLUCIについて、その後何かわかりましたか、特に、どこの部署でやっているのか。

○嘉名委員長代理

LUCIは照明の。

○長町委員

照明の夜間景観ですか。私が一番詳しいと思います。

○岡田委員

そうですか。夜間景観で頑張っていて大阪が取り組んでいるというのも、今の私たちが考えていく上で踏まえておくべきだとすごく思いましたが、夜間景観も一応、ここに出ていますので。それで、一応加盟都市に大阪はなっていますが、結局表彰されたのは金沢市になっていますよね。

○長町委員

LUCIはアメリカ以外のヨーロッパ基準の国際組織で、夜間景観の施策を持っている行政が入るのが基本なんです。ですから、大阪は光の委員会が入っていて、これはLUCIのメンバーとしては異例なんです。名刺交換なんかすると、みんなマルセイユ市都市計画部長とかそういう名刺なんです。

メンバーに参画しているメリットは何かというと、毎年2回カンファレンスがありまして、興味があればそれは非常に面白い、各都市が夜間景観を、どういう施策を持ってどういう戦略的で行っているかという話が聞けるんです。それ以外に、光のイベントと総会があるんですけども、恐らく、皆さんの耳に入っているのはLUCIのイベントの部分で、光の委員会のイベント系のジャンルとしてリヨンの光の祭典を大阪も目指すんだということでLUCIの話が出ているんです。

ただ、本来はLUCIにここのメンバーの方が行くといい会議なんです。私は何回か行っていますが、私ではなく、行政の方が行く方が本当は素晴らしいんです。なので、夜間景観について光の委員会が議論をするということで私は入っているんですけども、そっちが優勢という感じがちょっとしてまして、光の委員会は、ガイドライン部会、イベン

ト部会と分かれているんですけど、イベントは動くけど、実際の都市施策の中に夜間景観が入らないと動けないですよ。光の委員会でやっても事務局が民間なので施策にならないというのがあって、神戸なんか逆に、夜間景観は絶対に景観施策に必要なので私は入って夜間景観の話をたくさんしているんです。それは、夜間専門の委員会ではなく、全体の中に夜間の話が入る。それが本来なので、岡田委員がおっしゃるのもまさにそのとおりだと思います。夜間景観を都市の景観施策の中にしっかり位置づけるというのは、世界的には普通で、L U C I ではみんながその話をしていて、そのギャップに驚いている感じ。大阪府、大阪市の統合の光の委員会がL U C I のメンバーで参加資格があるので、大阪市の都市景観担当課長なんかが行くことには全然問題はないので、ぜひ御出席をいただければと思います。

○岡田委員

恐らく加盟している都市は日本では大阪だけですよね。

○長町委員

そうです。

○岡田委員

そういうところでも大阪は実は頑張っているわけで、この委員会は景観にかかる委員会ですから、何かそこでも連携や意識をしてもいいと思いますし、あと、もう一つ残念だったのは、大阪は唯一加盟している都市ではあるんですが、でも、結局、受賞したのは金沢ですよ。

○長町委員

あれは都市がいい悪いではなくて、毎年、エコロジーの視点で何かをした都市を表彰しているんです。たまたま金沢がエントリーしてとっているんですけど、大阪も幾らでも可能性はあるんです。公園5ヵ所の整備をして、全部LED化して、エネルギーが8分の1になりましたというのは実際やっていますので、あの表彰が金沢だったということ自体は余り問題ではないです。

○岡田委員

私はちょっとくやしかったんですけども、金沢を目指せというのではないので。金沢には恐らく暗闇というものがありますから、夜景というものを考え方が多分、大阪とは全然違うと思うんです。だから、大阪ならではの夜景の見方というのも議論する一つの契機にはなるかなと思ったんですけど。

○長町委員

そういう意味でいくと、光の委員会は持っていること自体がすごいことで、画期的なんですけれど、だからこそ厳しいところは、実は、大阪は日本の都市で唯一光のマスタープランを持っている都市で、マスタープランの下に光のガイドラインも冊子化されています。夜間景観整備をするときはこういうルールで、こういうやり方でやりましょうというものが出てくるんですが、いかんせん、それと大きな市域全体の話はリンクしていません。そこは検討いただくといいかもしれないです。

議論をし尽くして5年以上かけて日本で唯一のマスタープランを持っているのが大阪で、そのガイドラインはすごく根拠のあるガイドラインなんです。ですから、今回いろんなことを見直すのであれば、その中身を見ていただいて、議論いただくといいですね。

○澤木委員長

ありがとうございます。

21ページに地域活動というところがありますけど、そういう範疇で少しレベルの高いところでやられているお話とか、地域活動の中では、まちづくり任意団体でグランフロント大阪TMOとか、御堂筋のまちづくりネットワークとか、多分、先ほど出てきた大阪駅前も組織をつくっていろいろ検討を始めていると思うんですけど、そういうところから出てくる景観に対する要望というか、そういうものも、早いうちにすくい上げていくほうがいいと思いますけども。

○長町委員

今、澤木委員長がおっしゃったように、エリアでいくと、先ほど嘉名委員がおっしゃった中崎町とか、九条とか、地元組織があるところがあるじゃないですか。京都の場合は先斗町が画期的に変わったと思うんです。先斗町式目というのは地元組織でつくられて、その式目イコールガイドラインですけど、地元で自分たちの景観ガイドラインをつくってやるのが一番早く効いてくるわけですから、今、その小さなエリアのときに、中崎町とか平野郷とか、拾えるところがあって地元組織がある、テーマがあったりNPOがあるようなところでまず、社会実験的にトライするのはどうでしょう。大阪は神戸と比べると圧倒的に地元と連携できにくいので、できそうなところでやってみるというのはいかがでしょうか。どうですか、嘉名委員。

○嘉名委員長代理

さっきのLUCIの話もそうなんですけど、僕は大阪のいいところは勝手にやる人がい

るのがすごくいいことで、それにあまり行政が絡んでいないというか、あえて口を出していないというか、それが実は機動力を生み出しているという利点もあると思うんですね。ですから、行政施策に乗せようとする書けないことが出てきてしまうとか、そういう部分もあるので、地元にとってどれが一番なのかは考えたほうがいいと思っています。だから、今は今でよさもあるかなと思います。

ただ、その一方で実は問題もあって、それが心齋橋筋の景観協定で、これは全員同意なので400個ぐらいの押印をもらって商店街型では全国初の景観協定を結ばれた。それは、地元の紳士協定でやる方法もちろんあったと思いますけど、心齋橋筋としては、法的な担保がある形で運用したいと頑張ったと。行政としては一応、景観協定という制度は用意していたからそれを使ってくださいとは言えるけど、相当苦労された話も聞いていて、本当はそういう地域の人たちが景観をつくりたいと思ったときに、もう少し使いやすい制度があると応援できる部分はあると思うんです。

今、残念ながら景観協定は全国的にも厳し過ぎるという議論としてあるので、地域の人たちが、うまい使い方ができるような制度を市として用意する。あるいはでき上がったルールにお墨つきを与えるようなやり方とか。行政がルールづくりまで入ると、やっぱり書けないことが出てきてしまうというのは我々も行政もわかっていると思うので、そのあたりの関わり方、積極的に支援するスタンスだけど、細かいところまで行政が口を挟むようになってしまうと、大阪らしさが出なくなる気もするんです。

○澤木委員長

関連して、多分地域では景観が主目的にはなりにくいところがあるので、地域のやりたいことや課題、まちづくりの中で景観というツールがあるとしたら、それをどう使うのか。景観目標もあわせてつくっていただくとか、そういうことをやっていく。多分、景観だけで入ると、相当難しくなってくるので、地域の実情に合わせてやっていくのが地域連携ではあるのかなと思いますけど。長町委員のおっしゃる光の委員会みたいな、目的がこちらと近いあたりとは、もう少し情報共有していくということかなと思いますし、大阪駅前とかグランフロントとか、大阪の目玉になっているようなところは、戦略的に景観的な仕掛けを入れてもらう。

やっぱり地域によっていろいろ違っているし、要綱でずっとやってきた美観誘導でも、長堀以南と以北は違うからもう少し分けてやっていきたいという話が出ているので、そういったきめ細やかな対応ができるように全市一斉ではなく用意していくというのは、下村

委員がおっしゃったゾーンもいろんな既存のゾーンがあると思いますけど、それごとにちゃんと施策体系が立つように枠組みは考えておくということですかね。

○下村委員

本当に、おっしゃるようにもうええやんというところをどう決めるかだと思うんです。もうええやんというのは、ゾーンとしての共通する部分と、ディテールのゾーンで特化して流動していったり、規制していったりするようなゾーンとの重みづけが多分変わってくる地域があって、それは年度ごとに変わってくるので、嘉名委員がおっしゃるような活動が起こったときに、景観計画ですのでどう書いておくかというところで、白地に抜いておくのか、そうではないはずなのでそれをどう書くか。おっしゃっていることは非常によくわかるし、これが足かせになったら非常にまずいので、後押しするような仕組みをこの中でどう書いておくかということも考えておく必要があると思うんです。

ここにはアドバイザー制度みたいなのがなくて、エリアごとの活動が非常に活発でいきなり出てくるし、民間ですとお任せしていいところが多いんですけど、そうじゃないところに対しては言えるような仕組みを持つておくのかどうかも含めて、嘉名委員がおっしゃるように、動いていく中で大阪のまちというのは変わっていくでしょうし、非常にインパクトが出てくるでしょう。それを押さえ込まない形で景観に配慮してもらえ、澤木委員がおっしゃるような、それを何か計画やガイドラインで、書いておかないとだめだと思っ
ていまして。

○澤木委員長

その辺のテクニカルな部分もありますけど、実際にどういう景観計画、あるいは、制度というアウトプットを答申で出せるか。

○下村委員

出せるかということだと思います。

○澤木委員長

テクニカルな話も最後のほうで出てくると思います。

○嘉名委員長代理

あと1つだけ手短かに。

平成18年のときの問題意識をお伝えしておく、これから変わっていくであろうまちはしっかり理解して、ちゃんと対応策を考えておいたほうがいいということは言っていました。

具体的には、工業系用途で、土地利用転換が進んでいるところは何らかの景観の対応策を考えておかないといけないのではないかと。用途上は住宅系用途や商業系用途に変わることは構わないけど、具体的には小さい工場は戸建てに、大きい工場はマンションになって、かなり密度感、ボリューム感が違うものが同ジェリアに共存するという景観を本当につくっていいのかといった議論はしていたんです。

だから、これから考えていくに当たっても優先順位という話は先ほど申し上げましたけど、これから大阪のまちがどう変わりそうかということはベースとしてもっておくという話があると思います。都心はそれなりに皆さん頭の中に入っていると思いますけど、例えば東西線ができたときに、御幣島とか、あの辺ががらっと変わったんです。小学校も新設されたと思うんですけど、開発インパクトみたいなことで大きくまちが変わるということは起こり得て、そこは先手を打っておくという考え方はあっていい気はします。

当時と比べると大分、工場の土地利用転換が下火になってきて、あの頃は流出でマンションという形で、最近はそうでもないと思いますけど、やっぱり土地利用の変化が起こりそうだという状況があるなら、それに対して手を打つという考え方はあっていいと思います。

○澤木委員長

ありがとうございました。

いろいろ多角的な面からたくさん御意見をいただいたので、もう予定の時間をオーバーしてしまっただけですけど、もう一、二名ですけどよろしいですか。

この後、先ほど説明があった今後のスケジュールだと、1月、2月の寒いときに現地調査という話もありますし、夜間景観も大事だから夜にまちを歩くというのものもあるかもしれませんが、最近の動きとか特にみんなで共有しておいたほうがいいという場所は見にいけないと思います。お忙しい時期なので、全員でというのは難しいかもしれません。そのあたりを踏まえつつ、本日いろいろ貴重な御意見を、それぞれのお立場も含めていただいていますので、その点をまた整理しながら、第43回をやろうとなっておりますので、事務局でまた論点整理をしていただければと思います。

それでは、進行を事務局にお返ししたいと思います。皆さん、御意見をありがとうございました。

○安藤開発調整部長

長時間にわたり貴重な御意見を本当にありがとうございます。私も何か言おうかと思っ

たんですけど、余りにもたくさんいただきまして、ちょっと混乱している状態ですけども、アメニティと美しさという言葉、多分、かつて私たちの先輩は本当にそう思っていたと思うんです。そう思っているいろいろやってきた。大阪のまちはあんまり景観的によくないとよく言われますけれども、でも、嘉名委員がおっしゃったようにかなり思い切ったことをやってきて、公平に見ていただければそんな悪いところばかりでもないと思っているんです。近隣の都市と比較してというのは、自分の欠点と相手の長所を比較されているようなところがあって。中之島があって、ああいうまちは他にないと思うんです。御堂筋だってそれなりにいいまちになっていますし、いいところもでき上がってきていると思っています。恐らく、市民の方々もそのことは意識していただいていると思います。

それと、先ほどから何度も出ていますが、地域主体のまちというのは本当に動くようになってきているという現実があります。景観は最初のころは我々の思いが先行して、美観誘導とか、かなり今ではあり得ないような仕組みで行政が引っ張ってやってきたところは現実にあったと思います。でも、実際には景観は市民の皆さんに地道に取り組んでいただかないとでき上がっていかない、市民や企業の皆さんと一緒にやっていかないといけないと思います。そこがこれからどういう仕組みをつくっていくかというところだと思います。

それと、アメニティと美しさという一言でくくってしまうのは昔はよかったかもしれませんが、やっぱりこれは無理だと思います。誰のための景観なのか、何のための景観なのかということとセットだと思いますので、もう少しディテールを分析していきながら、手法と考え方を整理していくところがあるのかなと思います。

それから、夜間景観ですけども、関空ができたのは平成6年だったかな、その頃世界夜景会議を大阪で開催しまして、その頃から取り組んできて夜間景観も変わってきたかなと思っています。これも大事なことですので、今回の議論の中で意見をいただきながらとりまとめていただければと思っているところです。

いずれにしても、景観というのは非常に多岐にわたりますし、どこからどこまでが景観なのかという議論もございますので、非常に我々も頭を悩ますわけですけど、これから約1年間ほど御意見を頂戴しながら私たちも勉強していきたいと思っていますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

○中西都市景観担当課代理

本日はどうもありがとうございました。長時間熱心な御議論、また、貴重な御意見を頂

戴しましてありがとうございます。今後とも委員の皆様方には御協力よろしく願いいたします。

次回ですが、本日頂戴した御意見を踏まえまして整理させていただくとともに、寒い時期ではございますが、現地調査をさせていただいた上で、3月を目途に委員会を開催させていただきたいと思っております。後日、また日程調整をさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

これをもちまして、第42回都市景観委員会を閉会させていただきます。どうもありがとうございました。